

報告書整理番号第22号

コミュニティ再生特別委員会県外調査報告書

令和元年11月19日（火）から21日（木）まで、「地域コミュニティ再生の取組」及び「スポーツ活動の推進」について調査を実施したところ、その概要は次のとおりでした。

神奈川県議会議長 梅 沢 裕 之 殿

コミュニティ再生特別委員会 委員長 高 橋 栄一郎

コミュニティ再生特別委員会
県外調査報告書

令和元年11月19日（火）～21日（木）

1 調査の概要

- (1) 調査箇所 一般社団法人アスリート工房、座間味村立慶留間小中学校、那覇市若狭公民館
- (2) 出席委員 高橋(栄)委員長、石川(巧)副委員長、加藤(ご)、内田、いそもと、西村、曾我部、池田の各委員
- (3) 調査日 令和元年11月19日(火) から 21日(木) まで

2 一般社団法人アスリート工房

(1) 調査目的

一般社団法人アスリート工房は、障害の有無、年齢、スポーツの種目など、目的を問わず、みんなが楽しく交流できることをコンセプトとして、地域に根差した地域総合型スポーツクラブを目指している。

このため、楽しく続けることが成長につながるという考えと、技力だけではなく、人間として心も身体も磨く剣禅一如精神を大切にするという二つの考え方を軸に日々の活動を行っており、走ることの面白さ、楽しさを一人でも多くの方々に感じてほしいという目的で無料体験を実施するなどの取り組みを行っている。

本県では、近年、スポーツに対する機運や関心が高まっている中、誰もが身近な地域でスポーツを楽しむことができるスポーツ活動の場として、総合型地域スポーツクラブが重要な役割を担っている。

また、スポーツを通して地域住民が交流を図り、地域コミュニティの中心となる総合型地域スポーツクラブの質的充実やスポーツ活動の活性化に取り組んでいることから、同法人におけるスポーツ活動の推進の取り組みを調査することにより、今後の委員会調査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

沖縄県の中では、65団体中、64番目に認定を受けた団体で、2014年から運営を開始した団体である。4歳から80歳までの方々が会員となっており、現在は650名弱の方が登録している。また、神奈川県においても、座間市で活動を行っている。

団体の趣旨は、トップアスリートを育てることではなく、楽しく走ることを柱としており、その中から優秀な選手が出てきてくれば嬉しいと考えている。子供たちに走る技法を教えると、目に見えてよくなる。また、スポーツ鬼ごっこの資格をスタッフ全員が取得しているので、走ることを楽しんでもらうように努めている。スポーツを通じて、地域の社会的問題解決を図ることにも主眼を置き、走ることから派生したプログラムを大学などの教育機関とも連携して実施するなど、いろいろなジャンルの選手に提供している。

10代から20代の若者はテレビを見ないことから、Y o u T u b eなどのSNSを活用した広報にも力を入れており、代表自身も陸上アスリートであることから、Y o u T u b e rとして走る広告塔となって活動している。また、メディアへの露出も重要と考え、共催団体との共同ニュースリリースなど、機会のあるごとにメディアへの呼びかけを行っている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 昔の根性でスポーツという時代ではなくなったが、今の時代に適応するためのコツはあるか。

応 答 今は、小学生のころから運動するという機会すらない子供が多い。30人から40人に1人は学習障害とも言われており、そういった子供を見ることもしている。また、若い世代はSNSを使っているが、私たちもSNSを使うことで、それを見てくれた人に運動のきっかけをつくりたい。そういった活動をメディアで取り上げてもらい、多くの人に広めていこうということで、メディアへの訴えにも力を入れている。

質 疑 活動の場や組織体制を聞きたい。また、神奈川県でも今後、部活動指導員をふやしていかなくてはいけないと考えており、講師派遣事業を行っているとのことだが、具体的にはどのようなことを行っているのか。

応 答 活動の場所だが、宜野湾市の学童がオフィス兼事務所となっている。いろいろな場所にある公共施設を使って、子供たちに教えている。また、本日の会場であるANAスポーツパーク浦添も浦添市の公共施設だが、ここでも活動している。ほとんどが、学校が終わる夕方からのプログラムになっている。私たちが行っている派遣事業としては、スポーツ専門学校への講師派遣などがメインである。

質 疑 経済的な事情で参加できない子供への対応はどうしているのか。

応 答 費用に関しては、兄弟割引や父子家庭、母子家庭の割引を設けている。学童を行いながら、ほかの習い事もできるように配慮している。

質 疑 来年はオリンピックがある。オリンピックを目指すようなコースはあるのか。

応 答 沖縄県は陸上競技の部活が全国で1番少ないところではあるが、トップアスリートを育て、民間につなげるということを行っている。

質 疑 自発的に始められたのか、それとも行政からの働きかけがあったのか。

応 答 自分自身が、世界大会でメダルを取れた時に、何かの恩返しをし

たいと思った。陸上競技では食べられないとの風潮があったが、そのようなときに、総合型スポーツクラブを知った。通常だと、補助金から始まるが、自分たちは違う。

(※ 上記以外の質疑は、施設見学中に随時行われた。)



(4) 調査結果

一般社団法人アスリート工房は、地域に根差した総合型スポーツクラブとして、スポーツを通じて地域の社会的問題の解決を図っている。また、補助金に頼らず、独自の取り組みで沖縄県のスポーツ振興に貢献している。

以上のように、一般社団法人アスリート工房におけるスポーツを通じて地域の社会的問題の解決を図る取り組みを調査したことにより、本県の今後の施策を調査する上で参考に資することができた。

3 座間味村立慶留間小中学校（慶留間島留学制度）

(1) 調査目的

慶留間小中学校は、慶留間島において唯一の学校であり、児童・生徒数が15人程度という極小規模併置校だが、2014年から開始された慶留間島留学制度により、島外からの小学校4年生から中学校2年生までの児童・生徒を受け入れ、慶留間島で1年間共同生活を送りながら、地域と密着し、地域との協力を得て、便利さに頼った生活ではないからこそ、本当に必要で正しい知識を身につける取り組みを実施している。

また、個人、ボランティアベースで取り組まれてきた同制度を、座間味村むら・ひと・しごと総合戦略により、人口減少の克服や地域の活性化に向けた施策として、かつての本村の強みであったIターン・Uターン移住による社会増を取り戻すとともに、定住増を実現するため、留学制度を支援して定着と発展に取り組んでいる。

本県では、神奈川県まち・ひと・しごと創生総合戦略において、本県を取り巻く状況を踏まえ、人口減少と超高齢社会を力強く乗り越えていくとともに、地域コミュニティの活性化へ向けて市町村と緊密に連携し、現場での課題や取組事例を共有するとともに、地域で活躍している人材、団体等の取り組みを後押ししていることから、同校及び同制度の地域コミュニティの取り組みを調査することにより、今後の委員会調査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

留学制度の前身として、2005年から国士舘大学近隣の東京都世田谷区の児童・生徒を対象に、5～16日間で自然体験教室を実施し、2007年から座間味島を利用していた。自然体験教室をきっかけに、自然体験教室に参加した保護者から、1年程度の留学の希望があったため、座間味島留学へと展開して、現在に至っている。

留学の条件として、学力だけではなく、長期間、親から離れてみずから挑戦する自立する力、掃除、洗濯等の生活力、自己成長に向けて目標を明確に設定されているかといった学び、自然への興味関心、活動意欲をはかる楽しさといった点を重要視している。学力向上への取り組みとして、学校の授業だけではなく、英会話やZ会といった通信教育も導入し、留学を終えた後も安心して復学できるための学力を定着させている。

留学してくる子供たちは、慶留間小・中学校の近くにある家でシェアハウスのような形で共同生活を送っている。自分のことは自分でやること、自分で判断することをモットーに子供たち同士でルールを決めながら、子供たちだけの生活を行っている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 英会話についてはどのような取り組みをしているのか。

応 答 当初はネイティブのALT教師がいて、毎日、日常的に子供たちにかかわっていた。英語力の取り組みとして、子供たちの日常生活を英文で手紙にし、世界中に向けて発信している。

質 疑 学力向上の取り組みについて、Z会を使用しているとのことだが、どのように行っているのか。

応 答 ほぼ、マンツーマンで教師が勉強を教えている環境に加えて、留学生が東京等に戻った際に中学、高校の受験が待っていることから、通常の学校からの宿題に加え、勉強をするためにZ会を共通のテキストとして活用している。留学生の出身地域は教育熱心な地域が多く、去年から川崎市の進学塾と提携している。保護者は戻ってきた際の学力面を非常に気にしており、こうした環境にあることから、座間味の子供たちの学力は高く、沖縄県下でもトップレベルにある。

質 疑 英検、漢検の取得など、共通の目標を設定することで学習意欲が上がるものと考えているが、この学校では、そうした点についてどのように考えているのか。

応 答 自立した学習の中で検定取得は必修としている。成果が目に見えてわかることで啓発が進むと考えている。

質 疑 これまでの詰め込み学習と違って、生きる力、考える力を身につける取り組みを行っているとのことだが、今後、受け入れもふえるのではないか。

応 答 国の取り組みに応じて実施する。子供たちだけで勉強するには限度があるが、自立する力がつくことで勉強もするようになる。

質 疑 留学期間の1年を過ぎても、翌年ももう1年とスライドする生徒はいるのか。

応 答 通常、1年で留学は終わる。二、三年残るケースは非常にまれだが、もろもろの事情により残ることがある。その後、波止間に移ったケースはある。

質 疑 受け入れる側の生徒への影響はあるのか。また、Z会については座間味村在住の生徒も行うことになるのか。また、留学してきた生徒と地元の子供との関係はどのように考えているのか。あわせて、留学を受け入れたことで地域へのよい影響はどのようなものか。

応 答 本校の全国学力学習状況調査は全国トップレベルである。地元の生徒も留学生も分け隔てなく扱っており、各々の意欲には差がない。以前から、教職員の子供がこの学校に通い、地元の子供と一緒に学

習してきた風土がある。

(※ 上記以外の質疑は、施設見学中に随時行われた。)



(4) 調査結果

座間味村立慶留間小中学校は、島外からの児童・生徒の留学を受け入れ、共同生活を送りながら豊かな自然環境の中で地域に密着し、地域の協力を得て、自立心を高める教育を行い、全国でトップレベルの学力を有している。

以上のように、座間味村立慶留間小中学校における慶留間島留学制度の取り組みを調査したことにより、本県の今後の施策を調査する上で参考に資することができた。

4 那覇市若狭公民館

(1) 調査目的

那覇市若狭公民館は、主な対象となる区域に生活困窮世帯が多く、地域につながるの世帯や急激な外国人留学生の増加など、地域が抱える課題に対応するために、とりあえず、若狭公民館へ！というテーマのもと、インターネットや広報誌を活用した多様な情報発信を行っている。

また、公民館活動及び地域の魅力を顕在化し発信することを目的に発行されている、広報わかさが、全国公民館連合会主催の第7回全国公民館報コンクールで最優秀賞に輝いたほか、地方新聞46紙と共同通信が設けた第9回地域再生大賞において優秀賞を受賞するなど、ユニークかつ創造的なプログラムで取り組む公民館として、地域連携の強化、生活文化の向上及び地域生活に根差した市民の学習の場として、誰にとっても必要な、役に立つ地域づくりに取り組んでいる。

本県では、県政の総合的・基本的指針を示す総合計画である、かながわブランドデザイン第3期実施計画において、めざすべき4年後の姿の象徴として、コミュニティ再生・活性化による笑いあふれる100歳時代の実現を掲げており、地域の人材が気軽に集える場を提供し、地域コミュニティによる支え合いを実現していくことを推進していることから、同館の地域連携強化等の取り組みを調査することにより、今後の委員会調査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

公民館について、条例によって設置される社会教育施設としての公立公民館と地域の共有財産としての自治公民館があるが、沖縄県においては後者がメジャーである。那覇市若狭公民館は、公民館民営化の流れを受け、平成27年から特定非営利活動法人地域サポートわかさが指定管理者となっている。

那覇市若狭公民館が抱えるエリアは歓楽街が近く、夜間保育園も多い。また、外国人労働者、留学生も多い中、地域のつながりが薄く、自治会加入率も14.8%と低い。生活保護の受給率も6.2%と高く、地域コミュニティの再構築が課題となっている。

徒歩圏内に公民館がない地区であっても、パーラー公民館といった移動式屋台型公民館の活動を展開するなど、那覇市若狭公民館なら何か面白いことができるのではないかという相談から事業が始まることもある。新しい動きをつくり出す人のフォロワーとして、寄り添い背中を押すことを心がけている。

小さなコミュニティを幾つもつくって顕在化することに取り組んでおり、地域全体がゆるやかにつながって、セーフティネットになっている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 若狭公民館の地区も課題の多い地域だと知って驚いた。地元の市

も自治会加入率50%と県内では低く、役員の担い手になりたくないことがネックになっているが、その点はどうしているのか。

応 答 これまでは自治会の役員を担っている人と、自治会に加入していないが、いろいろな活動をしている若い人などが顔を合わせる機会もなかった。すぐ担い手になってもらうことは難しいが、公民館の文化祭など、顔を合わせる場はできている。ただ、新たな人材の発掘につながっているとまでは言えない。

質 疑 フォロワーをふやす、つまり参加者を自分事にするために行っていることは何か。

応 答 小さなコミュニティをつくる話をしたが、自分で選ぶことが大事と考えている。強制せず、自分の興味ある環境を用意し、コミュニティを閉じないよう、見えるように、複数の中から選べるようにすることを考えている。また、入りやすく、抜けやすいようにしようとも思っている。

質 疑 若い人が新たな意見を言っても古い人たちが動かない。リーダーが変わらなければ意見を吸い上げてもらえないこともあるが、どのように対応しているか。

応 答 同じコミュニティではなく、違うコミュニティで薄く認識してもらうことがよいのではないかと。重なりを少しずつつくることを意識している。

質 疑 いわゆるコーディネート役を公民館がしていると思うが、館長一人ではできないと思う。頼れる人材をどのように捕まえているのか。また、どれくらい時間がかかっているのか。

応 答 若狭公民館に勤めて14年目で、少しずつつながってきたが、一人でできているわけではなく、頼りないから助けてくれる。強いリーダーがいるとそうはならないため、あまり気張らず、助けてということだと思っている。

質 疑 事業を進めるに当たり、全て館長が動いているとは思えないが、外部のNPOや職員など、誰が動いているのか。

応 答 自分たちだけではできない。行政だと評価が定まったものを行おうとするが、お金もかかるし、決まりきったものになってしまう。評価が定まらないうちに声をかけると、みずから動いてくれて、一緒に考えていける。ネットワークの中で事業が生まれている。事業費も他の公民館の3分の1で行えている。

質 疑 そのほかの市内六つの公民館の状況はどうか。

応 答 市内に指定管理は2館あり、もう一つもユニークな活動を行って

いて有名である。指定管理イコールよいかというところからわからないが、引き受けられる団体がいないため、進んでいない。

(※ 上記以外の質疑は、施設見学中に随時行われた。)



(4) 調査結果

那覇市若狭公民館は、地域の抱える課題に対応するために、移動式屋台型公民館の活動展開などさまざまな取り組みを行い、地域連携の推進を図っている。

以上のように、那覇市若狭公民館における地域連携の強化等の取り組みを調査したことにより、本県の今後の施策を調査する上で参考に資することができた。

<参 考>

- 1 随 行 者 遠藤主事（議会局議事課）、吉田主幹（政策局総務室）、
大高副主幹（スポーツ局総務室）、森川副主幹（福祉子どもみらい局総務室）

- 2 調査箇所側出席者
 - （1）一般社団法人アスリート工房
一般社団法人アスリート工房代表、一般社団法人アスリート工房ジュニア
コーチ、一般社団法人アスリート工房コーチ
 - （2）座間味村立慶留間小中学校
慶留間島留学制度代表、座間味村立慶留間小中学校長、区長兼村議会議員
 - （3）那覇市若狭公民館
特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事長、那覇市若狭公民館長